じのもんオンラインショップ

がんばろう能登
食べて石川・能登を応援！

ふるさとは宝の山！
南加賀から奥能登までを知り尽くした
じのもん編集部厳選！
石川・能登のおいしいモノが自宅に届く

じのもんオンラインショップ
［公式］サイトはこちら

POINT 1 便利なエリア検索機能

色分けされたエリアをタップするだけで
「じのもん」のカテゴリーが表示されます。

POINT 2 便利なカテゴリー検索機能

- 農作物
- 海産物
- 精肉・肉加工品
- 麺類・惣菜
- 調味料・発酵食品
- スイーツ・お菓子
- パン・ジャム
- 飲料
- 豆腐・乳製品・卵
- ヘルス・ビューティ
- 工芸品
- 生活雑貨

「農作物」であれば、さらに詳しく「米・餅」や
「野菜」などが表示されます。

JINOMON MADE IN FURUSATO
発行／株式会社ストアインク
本社／〒921-8043 石川県金沢市西泉1-66-1 スプリングポイントビル3F
☎ 076-244-7747 ✉ info@jinomon.com

Support Magazine

2024_
08_23
2.

Noto / Okunoto

能登・奥能登応援マガジン

じのもん JINOMON MADE IN FURUSATO

ふるさと石川応援プロジェクト
ふるさとを贈って食して能登応援
がんばろう能登

能登の輪島塗を未来へ

輪島市で発展してきた輪島塗は、他に類を見ないほどの堅牢優美さ。震災の中でも力強く美しく残った輪島塗から、前を向き続ける能登人の誇りが感じられた。

写真提供:漆の郷 大藤

東金沢にオープンした輪島塗のギャラリー

東金沢駅前から車で約5分。神谷内（かみやち）にあるビルの1階に、2024年4月6日、輪島塗のギャラリー『漆の郷　大藤』がオープンした。

金沢の東、静かな住宅街の中。どうしてこの場所にギャラリーを開いたのか。

「被災を知った知人たちが金沢で再起したらどうかと声をかけてくれたんです」

そう話すのは『漆の郷 大藤』社長の大藤清さん。ビルへの入居を決め、輪島塗の品々を陳列すべく壁を白く塗り、照明や吊り棚を自分たちの手で取り付けた。棚に並ぶものは全て輪島塗だが、中央の大きなテーブルも輪島塗だという。

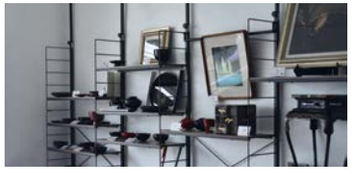
聞けば『漆の郷　大藤』は2024年に設立したばかりの新会社。親会社である『大藤漆器店』は輪島で大藤漆器店（本店）、漆の里交流館（中央通り店）、SANGYO交流館（マリンタウン店）の3店舗を展開しており、被災後、それらの店舗から無事だったものを選び、保管も兼ねて持ってきたそうだ。

「私たちはまだ運が良いほうです。燃えてしまったり、修理ができないほどに壊れてしまったと嘆くお店の方が圧倒的に多いのですから……」

話しながら、良介さんが輪島塗の重箱を見せてくれた。一見すると傷ひとつないが、よく見ると角にヒビが入っている。

「この程度なら綺麗に直せます。輪島塗は〈塗〉の技術がとても高く、堅牢優美とは言われていますが、本当に頑丈だと今回の能登半島地震を通して実感しました。少し傷がついただけというものもあり、私自身驚いています」

必ずまた輪島で輪島塗を――
今は前を向いて進むばかり



ギャラリー『漆の郷　大藤』内。販売用の美しい輪島塗が多く並ぶ中、被災して少し傷がついた輪島塗もあえて展示しているという。ただ、言われないと分からないほどなので、輪島塗の堅牢さに改めて驚かされる

大藤家による輪島塗の継承の経緯

父である清さんが『漆の郷　大藤』を設立して社長となり、息子である良介さんが入社したのは2024年1月のこと。能登半島地震が起こったから入社したのではなく、家業を継ぐべく前々から手伝っていたという。

「でも、私は大学卒業後に輪島へ戻ることなく、県内の一般企業に勤めていました。金沢にもよく行って……正直、家業を継ぐのは避けていたんです。家での記憶というと、父が輪島塗の外商に出たまま数ヶ月は帰ってこない。ほとんど祖母や親戚、ご近所さんに育てられた記憶です。それもあって、輪島塗の何がいいのか疑問だったんです」

能登の行事のたびに帰ってきてお土産をくれたけれど、家の中に父がほとんどいないという寂しさはぬぐいきれなかったという。

だが、良介さんが清さんの継ぐ決意をしたのは祖母・きよ子さんの他界だった。

「祖母が亡くなり、私が後を継がなければ、父の代で終わってしまうかもしれない。そう考えた時、輪島塗としての『大藤』の名前が無くなるのは嫌だなと思ったんです」

震災前は輪島の『漆の里交流館』で営業

8月の輪島大祭では『漆の里交流館』も夜まで開館

惣領町内の夏祭り。『大藤漆器店』前が御旅所に

大藤 清さん

『漆の郷 大藤』代表取締役社長。長年、塗師屋（ぬしや）として輪島塗を伝えるべく全国を回る。父の他界を機に開発した「輪島塗骨筒そうじゅ」が令和3年度プレミアム石川ブランド製品に認定。

大藤 良介さん

『漆の郷　大藤』取締役副社長であり店主、WEB担当。大学卒業後、ものづくりの一般企業に勤めるも、2021年、祖母の他界を機に家業を継ぐことを決意。現在、塗師屋（ぬしや）として日々修業中。

- 本社 **大藤漆器店**　0768-22-3800　輪島市惣領町5-52-1　https://oofuji-shikki.com
- 金沢店 **漆の郷 大藤**　金沢市神谷内ハ55 神谷内ビル103　https://urushinosato.jp

※「塗師屋（ぬしや）」とは……輪島塗は多数の工程を職人たちが分業して作り上げるのが特徴。「塗師屋」とは分業のまとめ役で、いわば総合プロデューサー

一方、清さんは息子の決意を待ちながらも、2020年頃から少しずつ『大藤漆器店』の中で、もうひとつ法人を作ろうと進めていたという。「うちは代々輪島塗職人の家系でして、父も祖父も輪島塗の職人でしたが、私と兄は職人の道を選びませんでした」と清さんが話し始める。

「実は、最初はふたりとも輪島塗の道へ進む気が無かったんですよ。兄は22歳で大阪から輪島に戻るも、勤め人になろうとしていましたし、私は私で父とそりが合わなさすぎて」

それなのに、ふたりが輪島塗に関わろうと思い直したのは、母の姿だった。

「私も兄も、母が泣く姿を見たくなかったんです」

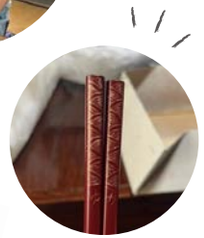
母・きよ子さんは、輪島塗の下地職人である父・久直さんが作った漆器を持って行商に出ていたという。

「140cmほどの小柄な人でした。その母が、自分の背丈以上の漆器を詰めた風呂敷を背負って、駅まで売りに行くんです。当時は輪島まで鉄道が通っていましたから、そこまで根気よく歩いて通って」

久直さんは職人としての腕前は良くても口数が少なく、仕事は見て覚えろと言うタイプ。加えて輪島塗のようにコツコツ根気よく作り上げていく工芸は、雑音が少ない時間帯で作業することが多く、当時は昼夜逆転生活となる職人が多かったという。

「父もそうだったし、酒飲みでもありましたから――子どもごころに父との思い出より、母との思い出が多くなりますよね。そんな中、父からかあさんを手伝えないかと兄に声がかかったんです。大切なひとが大変な時に、大事な言葉をようやくくれた。兄はその言葉で決意して漆器製造販売として大藤漆器店を1978年に創業し、数年後、私も兄に賛同して入社しました」

奇しくも、親子して家業を継ぐ決意をもたらした人物は同じ人だった。



夏休みの思い出にと、金沢の弘願院の一部を借りて輪島塗の沈金体験を開催

蒔絵ボールペン「雅風」

天然木の本体を漆塗りで仕上げ、蒔絵を施した高級筆記具。伊勢志摩サミット2016・G7首脳会議にて採用された

What's WAJIMANURI?

約120もの独自の工程を、それぞれの職人が分業して作り上げる「輪島塗」。多くの職人の目と手を重ねていくからこそ、他にない「堅牢優美」が特徴であり魅力!

[木地(きじ)]

山で約3〜4年、里で約1年寝かせ、厳選した木材で作成される。挽き物、指物、曲げ物とそれぞれの職人が手がけていく。

[塗(ぬり)]

能登の珪藻土を用いた「地の粉」に漆を混ぜ、完成まで何度も塗り重ねる。こうして深みある色と強度が出る。

[沈金(ちんきん)]

沈金鑿(ノミ)で漆の表面に文様を彫り、その部分に金を埋め込んでいく。漆を塗り重ねる輪島塗にこそ最適な技法だ。

[蒔絵(まきえ)]

細い筆を使って漆で絵を描き、その漆を接着剤代わりにして金粉や銀粉、螺鈿など多彩に用いて装飾していく。

なんとか生き延びた貴重な輪島塗――
少しでも販売をして輪島塗の維持
職人たちの職場復帰に少しでも力になれば

次世代へとつなげる視野と親ごころ

清さんも兄の孝一さんも次世代への継承も視野に入れていたため『大藤漆器店』と並んで、もうひとつの法人を作るべく3、4年前から動き始め、2024年に『漆の郷 大藤』を設立した。『大藤漆器店』は漆器製造販売業として店舗販売も行い、『漆の郷 大藤』は全国の百貨店へ外商として回り、顧客からのオーダーを『大藤漆器店』へ発注するという立ち位置だという。

「兄の息子が大藤漆器店を、私の息子が漆の郷 大藤を継いでくれるので、将来的にはいとこ同士で切磋琢磨してがんばってもらえたら」

でも、やっぱり、後を継ぐと決めてくれたのは、素直に嬉しかったですよと相好を崩す清さん。輪島塗という長い歴史を持つ伝統文化を、輪島塗を知らない人へ説明し興味を持ってもらうには、まず自分自身が理解していないといけない。難しい専門用語をそのまま使ったところで、相手のこころには響かない。だからこそ、清さんは息子の良介さんの感性に期待し「支えるから、自由に」と伝え、教えながら、一緒に全国の百貨店を回っている。

外商以外の活動を伺うと、「金沢のお寺や都内の石川県アンテナショップで沈金体験を企画実施することもありますよ」と良介さん。

寺でワークショップを開くきっかけになったのは、輪島塗の骨筒「そうじゅ」からだという(ここでは「そうじゅ」を作り出した経緯は割愛させてもらうが、このストーリーも現代において痛切に身に染みる深いものだ)。

なごやかな元旦の夕方に突如襲った未曽有の震災

本来なら、輪島の土地で『大藤漆器店』『漆の郷 大藤』の両輪経営をする予定だったが、思わぬ災害が起きる。2024年1月1日16時10分に発生した、能登半島地震だ。

「例年だと、うちは年末から正月三が日にかけて輪島塗会館で展示会をしています。でも、どうしても他の店舗が展示会をしたいからこの年だけ譲ってほしいと打診を受け、承諾したんです」

偶然にも皆そろって家にいる年末年始となった大藤家。快晴の元旦ともあって、良介さんは幼い息子と一緒に出かけていたという。

本店であり実家でもある『大藤漆器店』は、輪島市内から珠洲方面向かう国道249号沿いにある。さらに車で7分ほど東へ進めば白米千枚田だ。海と空の青、細やかな棚田の緑のコントラストが美しい

※2023年7月下旬、じのもんスタッフが撮影

崩落した道路、倒壊した家屋など、一瞬にして景色が変わってしまった。店内でも強い横揺れで商品が飛ばされたという。「この先にある珠洲は津波もあって被害がとても酷いんです。2023年5月の震災からなんとか復興してきたところなのに……今は、風化が怖いです。忘れ去られることが怖い」と大藤さんは心を痛めている

「すごい揺れで、地面が無くなり、道路が傾き、電柱が倒れ、家が崩れる、もう何がなんだかわからない状態で。その時、私は車を運転していたのですが、家まで帰れなくて、日は沈んでしまうし、安全な場所が無くて、息子と車内で一夜を過ごしました。翌朝になっても車を動かせない状態で、不安でぐずる息子を抱きあげて安全な道を探しながら3、4時間かけて歩いて帰ったんです。ふだんなら徒歩数分の距離なのに……」

道中、変わり果てたまちを見て言葉を失った良介さん。実家であり店舗である『大藤漆器店』は、朝市から白米千枚田の間にある海沿いに位置していることもあって、なんとか倒壊や火事を免れたものの、品物は全て倒れて落ちてしまっていた。

だが、その多くが箱に入っていたことと、輪島塗そのものが頑丈であることが幸いして、商品のほとんどが無事で、凝視しないと分からないほど小さな傷ですんでいるものが多かったという。

「なんとか生きのびた貴重な輪島塗を守りたいという思いが強くなりました。輪島塗は作って販売するだけじゃない、修復もできると伝えることで、輪島塗の使いやすさを知ってもらい、職人さんたちの技術を守ることが、復興へとつながるのだと考えています」

切羽詰まった状況下で迫られる決断と苦悩

「地震の時は、国道249号の輪島方面と珠洲方面の両側で崖崩れが起きてしまい、家は一夜にして孤立してしまいました。妻が肺炎にかかってしまい、長時間の移動も難しくて。息子夫婦が金沢への避難をすすめてくれましたが、妻を置いて行けないので私も残ることにしました」

自衛隊も必死に救助作業に携わり、支援物資が届くも、水も電気もない孤立状態は2週間ほど続いたと清さんは振り返る。在宅避難をしつつも、学校の体育館で避難している人のためにバケツリレーや炊き出しを手伝い、気が滅入りそうになったら、知った仲間たちと肩を叩いて笑い、元気を出しあった。

「ただ、このまま在宅避難は難しいと区長さんから知らされまして、行政が支援していた加賀方面への避難を決意しました。旅館での避難生活は、最初の1週間は嬉しかったですよ。地域の人が気を遣って、元気づけてくださって。でも、だんだん気持ちが落ちていってしまって、申し訳なくて。どうしても肩身が狭いと感じてしまうし、気心知れた仲間もいない、はたして自分は輪島に帰れるのか？ 底知れぬ不安が日に日に強くなっていくんです」

気丈でポジティブな清さんですら気が滅入ってしまったのだから、人に会うのがおっくうになっていった人は相当数いた。中には、部屋から一歩も出られない家族も数組いたという。

現状を真正面から見据えつつ、前へ

一方、金沢に避難していた良介さんもSNSで心境を吐露していた。商品を避難させるべく輪島の店舗に向かうたびに、火事場泥棒が入ろうとした跡を見つけてしまったとも話す。

「当たり前に水があり、電気があり家があり車があり命があり、当たり前に送ってきた日々がこんなにも一瞬にして崩れていくんだなと思い知らされました。だからこそ弱音を吐かず残された身を無駄にはせずにがんばっていきます。『漆の郷 大藤』への入社が震災と同じタイミングとなってしまい、ゼロスタートどころかマイナスからのスタートになりました。もう、これ以上マイナスになるところはありません。この先は上がるだけと信じています」

さらに良介さんは、震災をきっかけに前向きに進んで人と会うようにしていった。SNSとネットショップの担当者として、さまざまな発信をし、清さんの人脈も守りつつ自分なりに人脈を築こうとポジティブに動いている。

輪島を含む能登全土の復興に時間がかかっても、いつかは輪島に——

そのためにも、震災から目を背けず、むしろ風化して人々から忘れ去られてしまわないように、輪島塗を発信することで伝えていきたいと話す。輪島塗という伝統工芸品がもつ「ひと・もの・こと」のつながりが、震災復興にもつながると信じて。

清さんは塗師屋として、百人一首の豆皿（計300枚）、店舗の内装を輪島塗にするなどさまざまな注文を受けてきた。話を聞くほどに輪島塗のポテンシャルを感じられる

「輪島塗は究極のSDGs。全て天然素材で、修理して使い続けられるんです」と良介さん。新しい感性で輪島塗を発信している

「輪島塗骨筒 そうじゅ」は清さんが開発し、良介さんが継いだ商品のひとつ

自分の店の品だけでなく
困っているお店の品も扱うことで
輪島塗全体の復興につなげたい

捨てずに繰り返し使い続けて伝統工芸の技術を次世代にも

多くの工程を各職人が手がけるからこそ、輪島塗は修理可能。使用するうちに傷んでしまっても、直せて永く使えるからこそ「一生モノ」とも称されているほど。

そして、輪島塗を修理することは若手職人の技術向上にもつながるという。彼らの技術研鑽の機会、輪島塗を未来へと伝えていくためのSDGs活動も始まっている。

なおす×つなぐプロジェクト
https://wajimanuri.or.jp/kumiai/naosu-tsunagu